

学びのコミュニティ研究会 14



平成27年9月6日13

茅葺き民家交流館土居家

会長挨拶 讃岐 幸治

学んだことを実践に、実践を学びにスパイラルすればいい。自分が学んだことを還元、おすそわけをして、その人がまた伝える形で。知的循環型を目指している。事例もそれに沿った形で考えていきたい。

参加者18名

資料説明: 文科省の事業を受けることになった過程および、第8回地域教育実践交流集会について。

第1部 実践事例

事例① 青年・青少年を通じた実践～必要とされる喜びを感じよう！～

中川公民館 井上 裕也



井上氏 自己紹介

中川公民館の概要を説明する。

職員3名 館長非常勤 嘱託職員常勤 主事常勤

小学校1つ137名 保育園1つ38名

ほとんどが農家。稲作やビニールハウスによるいちご栽培をしている。古墳が発見されて、古代ロマンを感じるようなところもある。最近、新興住宅地の発展により人口は少しずつ増加している。

公民館主事に赴任してから3年目になるが、その3年間での事業内容について話をする。

1年目は、各種団体の事務局を任せられ、従来の事業、ピザづくり、昔の遊び、ソフトボール大会、敬老会、盆踊り、運動会、文化祭等の各種イベントの開催をした。イベントを通して、地域の活性

化や住民とのつながりができたと思う。

反省点としては、20代30代にスポットを当てた事業がなかったこと。小学生対象の事業はあるが、中高生対象のものが無い。2年目は、その世代を呼び込むことにした。

2年目、中川小学校5・6年生対象に、親元を離れて集団性・協調性を育むことを目的として3泊4日の通学合宿を開催した。一緒に料理をしたり、もらい湯をしたり、協力してつながりを深めた。この通学合宿では、中学生にお手伝いしてもらうことにした。年の近い先輩と一緒に生活することで、子どもたちは安心して心を開くことができたようだ。大人のスタッフは自分たちもこんなふうだったなあと思い出したようである。中学生は、小学生の世話をすることで、頼られる先輩となり、自己有用感を持つことができたようだ。みんな、気持ちよく参加してもらったと思う。ふれあいタイムには青年層の若い人に入ってもらった。中学生の担当は肝試し・竹講座だった。青年7人、中学生10人、若い人を投入したことで、小学生の反応が大きかった。初めてのことで戸惑う中学生を子どもたちが積極的に話しかけた。おかげで中学生はリラックスしたようだった。

この活動で、若いスタッフが、おじさん、おばちゃんから大人気となった。お酒を交えた反省会のときに、若いスタッフから「きてよかった」といわれたのが一番嬉しかった。中学生も自信をもって帰ってくれたと思う。青年たちにも地域活動に参加してもらいたいと思い、『中川いいとも青年隊』を結成した。ゆるく、無理をせず、楽しみながら、とりあえず何かをすることを提案した。偶然にも、いつもお祭りに参加してくれている地域の方から今年は出店はこらえてほしいとの申し出があったので、青年隊にお願いした。

青年隊はたこ焼きをすることにしたが、初めてのバザーだったので事前に試し焼きをした。試し焼きはうまくできた。本番に臨んだが、本番はこげこげで商品にならないものがたくさん。すると、参加していた他の団体のおじさんが集まってきて手伝ってくれた。いきなり知らないおじさんがやってきて、不安だったが、完売することができた。やきとりを焼いていたおじさんは、「こんなことなら最初から呼べ」とも言ってくださった。頼りにしてもらうことが嬉しいと言われ、おせっかいな人がたくさんいて、とても印象的な一日だった。

地域の大人は、昔の青年団をみているようで嬉しいと言ってくれる。青年隊に話しかけている大人はきらきらしているようにみえた。教えたこと、話したいことが湧き出ているように感じた。若い青年隊のメンバーも戸惑っていたが、やさしく接してくれることで嬉しそうだった。中学生や青年たちにボランティアのお願いをすると、意外に人が集まってくれた。活動を通して、少しでも地域のことを思ってくれるようになった。

中学生の募集は、直接中学校へチラシをもっていった。私が、草引きをしているときに通りかかった中学生に、「手伝いに来てくれんかな」と声をかけたら、「いけたら行く」との答え。どうかなと思っていたが、申し込みがポストに入っていた。多少なりとも、自分を必要としてくれているとの思いがあったかと、嬉しかった。

3年目は、今年度となる。2年目以上に何かをしようと心がけている。今年も、6月に通学合宿をした。青年隊・中学生が手伝いに来てくれた。昨年はこちらで企画・準備をしたが、今年はほとんど、青年隊・中学生で行動してくれた。今年は、青年隊のメンバーが先生となり、かんたんな実験もした。スタッフの成長の場でもあったようだ。小学生は青年隊のメンバーと親しくなり、好きな人がいるか等、立ち入った質問もしていた。その風景をみていた大人も、

うちの子どもも青年隊に入りたいと言ってくれました。周囲の人に認められたようでほっとしている。

初対面の私にも自然に声をかけてくれた。小学生にも地域の活動をわかってほしいと思っている。中学生のスタッフは、キャンプファイヤー等をどう運営するか、作戦会議を行い、中学生が考えたレク優勝グループには、中学生が考え作成した文集、「中学生のありがたい言葉集」を渡すようにしているようだ。

中学生感想

「作戦会議の時はうまくできると思ったが、なかなか。小学生の感想をみると、楽しかったと書かれてあった。嬉しかった。みんなのおかげで自信をもってできた。今後も、地域の活動をしていきたい。」参通学合宿に参加して、成長が感じられる。中学生が、小学生に締めあいさつをした。小学生が慎重な顔で聞く。大人は、中学生も大人になったなと感じる。大人から中学生に、中学生から小学生に受け継がれた瞬間だと思った。

小学生の感想

小6の子「来年はスタッフとして参加したい」。これからの中川地区をひっぱってほしい。

中川地区のキャッチコピーは「世代越え よいところ受け継ぐ 中川の里」

成人後には、中川青年隊として盛り上げ、さらに、婦人会、壮年会とつないでいて、老人クラブでは地域を見守り知恵をつないでいてほしい。今まで育ててくれた地域に恩返しをする。郷土愛をはぐくみ、豊かな地域ができればと考えている。

地域の人たちは必要とされることで光り輝く。そうすると地域の在り方も変わってくる。子どもたちには役割を与え、自信を持たせる。協力してもらったら、具体的に感謝の気持ちを伝える。いろんな世代を超えることで、成長できると信じている。

Q：事業はどのようにして決めるのか。

A：既存の事業に足し算をする。ある程度、必要なものを大切にしながら、コラボ、リノベーションをしていく。地域の入り口が少ない。デビューするための入り口を増やして公民館に親しんでもらおうと思っている。

地域青年対象イベントとして、隣接の3館で青年イベントを行っている。

そうすることで、範囲を広げ、人を集めることができる。クッキングサークルやかるた大会、終わったらレクリエーションとしてドッジビー大会等、多田・中川・石城公民館共催として行っている。

平成26年には、食材ドラフトとして段ボールオープンでピザを食した。オータムトレッキングは雨のため中止となったが、かるた大会へ変更した。

今後は、ピザ窯を核とした教育活動、薪からの学習、山への理解、窯の学習、調理、人材育成マイスター養成などを計画している。

この仕事をするまで、地域の入り方もわからなかった。しかし、仕事でいろんな人とかわるうちに、温かい気持ちに触れ、心地よくなった。地域の人に必要とされていると感じることができた。恩返ししていきたい。

Q：若い人たちは、地元で働いているのか

A：社会人、地元の人。職員を使って声をかけている。今後はチラシやホームページをみてる人を増やしたい。フェイスブックやツイッターでも。

Q：どのように募集したか詳しく。中学生は何人くらい

A：参加者は、小学校が一緒だった人とか、口コミでお願いしている。中学生は、文章を中学にもっていくが、前の年に通学合宿を経験して卒業した中1生が10人協力してくれた。今年も同じくらい。なぜ来てくれるのか不思議な感じ。

Q：3年間で、恋が実った人はいるのか、今回、学校の教員がでてこなかったが、かわりがあれば。スーパーマンのような公民館主事がいなくなっても、活動できる、自立支援をどう考えているか。

A：青年隊での恋愛（婚活）そのようなケースはできていない。現在、11名。男6、女5。

学校とのかかわりは、特にない。（中学生）小学生は通学合宿があるくらい。中学生のことを評価してほしいと学校には要請している。

会計も公民館の金庫にいれるだけ、なくなったらどうするか悩んだが、公民館主事を離れたら、自分も青年隊に入って活動する。公民館ではないところからアプローチしたい。

学コミ事務局より

全部の事業のターゲットを把握してどう切り込んでいくか、久米地区でも通学合宿を行っているが、参加者動員は学校へお願いしている。そうすると先生が公民館にくる。個人から組織としてのネットワークしていくことで学校と公民館がドッキングし、継続していくことに繋がるのではないかと。



事例2 公民館 GP で取り組んだ実践

～木製クラフトの開発を通じた地域コミュニティの再生～

遊子川公民館 中川 圭介



文部省の事業、当初3年間の予定で計画を立てた。本来は今年度最終となるはずであったが、中止となってしまった。

遊子川地域は、松山から1時間半。山の中。標高1キロの標高差があり、自然の対応には飛んでいる。自然豊かなところ。遊子谷の紅葉はとてもきれいである。雪もたくさん降る。地域人口年々減少し、農林業は衰退、少子高齢化、福祉、医療、防災などたいへんである。人口348名、55.5%の高齢化。平成20年ころから地域活性化を目的に学習会を開く。22年8月遊子もり上げ隊発足。全住民が会員となり、全世帯から年間1000円集めて事業を開始、遊子もり上げ隊の活動は23年度から始める。

地域の30%が山林、林家の人がほとんど。過疎化により増える放置間伐材、放置竹林、利用して価値を再認識しようという取組を開始した。

24年度、保育所跡を木工所として拠点にする。まずは、制作部門として木工教室を開催する。木工文化の普及、経済活性化を目標にして、公民館等を中心とした社会教育支援プログラムに着手する。

中心メンバーは、遊子川もり上げ隊・公民館・集落応援隊（地域おこし協力隊）

豊富にある森林資源を有効活用することを目的として、地域へ木工文化の導入を進めた。木工による仲間づくり 木工教室 先進地の視察 イベント等ロゴマークもつくった。ちらしをつくって仲間を募ったところ初回18名参加。毎回、テーマをみつけて充実させている。最初は、勾玉・ポスト等の基礎的なものを学ぶ。さらには、ござを作る、木でドーム、橋づくり等を作成した。

ものづくりを身近なものとして知ってもらうための学習会では、塗料の学習や、ろくろをつかって木皿作り、かふん（楽器）作り等をした。また、愛媛県の生涯学習夢まつりにも参加した。先進視察では、北海道、木工に従事している人の育成等を見学、森林公園の有効活用を目的としたデザイン等も学習した。また、森林活性化の学習会を、愛媛大学社会連携支援部の先生をお呼びして行った。活動成果は、行政の職員の前でも作品集等、発表した。

26年度、公民館 GP の補助金が無くなったが、この取組について変更なし、活動を続けている。学

習を継続していかなくてはならない。今までは、公民館の一講座としていたが、木工組織ユスモククラブを設立、会員 37 名に増えた。木工講座、イベント、製品開発等、図面をみながらがんばった。出来上がった作品は展示会を開催した。10 月、中間発表として、岡山へ行って発表した。多くの住民を巻き込む算段として、地域全体を展示場とみだてて活動をアピールした。定常的な技術者・設備管理者の確保については、技術力を習得したメンバーにお願いする。日常生活の中に木工そのものを楽しんでほしいと、イベントを開催した。それぞれの趣味や生活上の用途に応じた制作活動に取り組んでいる。さらには、大学をはじめ商工会議所等、いろいろなところと連携している。

得られた成果は、ユスモククラブの設立、木工への知識及び技術向上、生産体制の整備
原材料、林業会社、製材所と連携、安価で提供できるようになった。

得られていない成果としては、製品化には予想以上の労力を要する。制作に携わる機会や労力等のこと。

今後は、技術力を上げていく必要がある。生産教育分野への充実を図りたい。
当面は SMS 等活用して、生産者が作った思い等を伝えながら気に入った人に購入してもらうようにする、家庭に木工製品をおいてもらう。

「食堂ゆすかわ」制作映画作りの話

2 年ほど前、地域 PR をしようということで映画作りをした。上映にあたって、予告編も作成した。遊子川はトマトの産地だけれど、生産についても落ち込んでいる。23 年 9 月、特産品開発班を設置 20 名参加。試行錯誤を重ねながら試作品をつくる。26 年 4 月、「食堂ゆすかわ」オープン。25 年度、「36 回中四国地区公民館研究集会」で、映画監督末広さんの講演を聞いて、トマトを使った特産品開発需要拡大をはかるため、地域 PR 映像制作をしようと思いつく。

愛媛を舞台にした自主映画の会、松山で活動されている森幸一郎監督にお願いした。PR は実行委員会、選び方は、この人なら大丈夫だろうと思われる人。約 2 か月で撮り終えた。地元の住民 62 名、撮影作業の協力者 100 名以上。撮影スタッフは全員松山から来ていただいた。最初の上映会は公民館で。200 名以上参加してくれた。「食堂ゆすかわ」は公民館の前で農家の人が営業している。

食堂ゆすかわ 上映



総評 讃岐口 幸治

いい発表を聞かせていただいた。公民館は地域づくりと人づくり、地域課題として、スクラム組んでどうやっていくか。課題解決だけならイベント業者に頼んでもいいかもしれない。人づくりは、自信も足してどうつなげていくか。つくることとつながり、自信、ほこりをもってまたひっくりかえして、うまく作っている。

「食堂ゆすかわ」はよくできているが、脚本もカメラも全部地域の人がしたほうがいい。ただ、悪役の俳優だけは、他から呼んだほうがよい。押し売りの業者が地域に入ってたいへんなことになる。シナリオも地域のみんなで考える。それが、次への段階、地域の人がどうかかわっていくか、そうなればすごい。

今までの財産をうまく使っている。何か、「ぴりっと」したエッセンスを一つプラスするとまた、ガラッと変わっていくと思う。

学コミ事務局より

公民館が地域の産業振興に取り組んでいる。公民館の設立当初は、公民館事業の1つに産業振興も含まれていたが、いつの間にか消えてしまった。他の地域でも、その地域でしか出来ないものを見出して、地域の活性化を目指してほしい。

Q：いろいろなイベントをこつこつされていたよう。参加者の18名から増えたようだが、活動のPRが成果を出したということか。

A：参加者のほとんどは、農家。秋の稲刈りが終わってからの

活動となる。頻繁に木工教室を開催しているわけではないが、工夫をしている。

Q：主な関係団体は。また、住民から1,000円集めるのに、行政的には問題がなかったのか。

A：「ゆすかわもりあげ隊」地域が自主的に立ち上げた。お金の管理に関しては、公民館がしているが、普段の勤務としてやっていいよということなので。

Q：香川県だと助成金をいただいてしているが…

A：遊子川の場合も、国の事業を取り入れて補助金をもらった。

Q：映画の交渉はどのようにして。

A：地域住民の方々と相談した。

Q：撮影はプロの方がしたのか。

A：プロの方。主役の人たちも半プロの方。脚本は素案を監督へ渡し、出来上がったものを実行委員会が再度検討した。

この取り組みで、地域がまとまったように感じる。

Q：第2弾の制作など、今後の予定をご教示願いたい。

A：「遊子川もりあげ隊」では、映画製作（2作目）への機運が高まってきており、現段階においては作品のキーワードを「都市部との交流」とするとともに、その制作を

“県内高校生”（放送部員3団体21名と想定）と協働して実現できればと考えている